

国際ツーリズムと華人祭祀

——タイとマレーシアの事例をもとに——

山下博司

東南アジアの華人社会で営まれている道教系の祭事の一つに、九皇大帝(九皇爺)の慶誕を祝う年祭(九皇會、齋節)がある。華南からの移民活動に伴い東南アジアに広く伝播・移植されたもので、マレーシア、シンガポール、タイでとりわけ盛大に挙行される。毎年同時並行的に、農暦九月一日から九日までの計九日間を費やして一連の道教祭儀が催され、主催者(寺廟評議会)、童乩(シヤーマン)、信徒など参加者全員が期間中の菜食を厳守する。英語で「ヴェジタリアン・フェスティヴァル」とも呼ばれる所以である。

国や都市などの立地条件の相違、寺院の由来や規模の差異などに応じて、祝祭の様態も多岐にわたる。国ごと、場所ごと、寺ごとの変容も看取される。筆者はこれまで東南アジアの数カ寺を訪れて祭事の挙行や寺廟の運営を集中調査し、差異の生起とその要因および変容の意義とを具に観察してきた。本学会では、すでにプーケットとシンガポールの事例につき各々報告を行っている。今回は国際ツーリズムの問題にも着目しつつ、タイとマレーシアの事例を比較対照しながら、華人ディアスポラの伝統宗教の一端を考察する。

マレーシアでは国土の多くの場所場所で九皇會が挙行されるが、その代表格が、東南アジア最大とも言われる首都クアラル

ンプルの西部・アンパン地区にある九皇大帝寺院の大祭である。クアラルンプルは、多数派マレー人のほか、華人系、インド系などの人々が集住する多民族都市・宗教多元都市であるが、九皇會の祭事に集うのは、首都圏の華人系信徒や寺の評判を聞きつけて国内外から参集した華人たちに限られる。同様の傾向はマレーシアの他の地域についても当て嵌まる。たとえば、ペナン島の九皇系諸寺廟や対岸アロースターの諸寺院では、かなり盛大に祭りが挙行されるものの、多数派マレー人やインド系の人々の関与は殆ど皆無であり、エスニティを超えた祝典の様相を呈してはいない。地域共同体あげての祭事の挙行という性格も観察されない。そこでの九皇會は、シンガポールにおけると同様、あくまで「華人の祭り」であり、華人系としての紐帯とアイデンティティの確認の場として機能している。観光化したペナンのタイプーサム(ヒンドゥー教の祭礼)で、インド系に加え華人系の人々の参加が目立つのと極めて対照的である。

国際ツーリズムを含む「祭事の国際化」による変容が著しいのが、タイ国プーケット県の諸寺廟で開かれる九皇會である。東部海岸を中心に島全体が一大リゾートであるという理由もあって、自傷行為を敢行する童乩の奇観の数々(頬を異物で貫いたり、刀梯を登ったり、火渡りをしたりなど)が、物見遊山の非宗教的動機で訪れるおびただしい参詣者を誘い、他地域の九皇會に比べ露天の店舗も数で遙かに勝り、しかもたいそう繁盛している様子である。華人系に加えタイ系の人々の祭事への参加も目立っている。

プーケットにおける九皇會は、「地域の祝祭」と「国際的な祝祭」の両様の性格をもつ。いずれの場合においても、この祭りを盛行に導いているのは祭典のもつ多義性である。祭りの目的は、祈願の成就、地域社会の融和、自己の帰属の確認、菜食の享受、物見遊山など、宗教・世俗の両面で人ごとに多岐にわたり、それに応じて意義も様々に分かれる。このような祭りのあり方を可能にした要因として、島の顕著な国際観光地化、および高度情報化やグローバルイズムの進展に伴う庶民の意識の変化、とりわけ宗教が人々に果たす役割の変化を指摘できる。皮肉ではあるが、現代社会の脱宗教的な風潮・趨勢が、この祭りを類稀な華々しいイベントに仕立て上げていると言いうことができる。本報告では、マレーシアの事例と対照しながら、祭礼の参与者へのインタビュ結果なども交え、国際ツーリズムの恩恵に浴するプーケット島の九皇會の特質と意義の変容などについて論述する。

九曜信仰と聖地巡礼

——南インド、タミル・ナードゥ州の事例から——

飯塚 真弓

本発表では、タミルにおける九曜信仰とその聖地巡礼を事例に、巡礼における集団性と個人主義的傾向の対立について、人類学的調査により検討することを目的とする。先行研究より、インドの聖地巡礼には、集団統合的機能(境界維持機能)、既

存のカースト関係を越えるコミュニティ的性格、さらに個人的な側面があると想定し、具体的な事例を分析していく。

九曜(ナヴァグラハ)信仰とは、占星術的知識にもとづき神格化された九つの惑星への信仰を指し、惑星同士、星座や星宿との相性が星の障り(グラハ・ドーシャ)として人間の不幸や吉凶を左右する。その特徴は、悪霊や死霊と同列に位置づけられる下位的神格でありながらも、自立した天体の動きとして超越的影響力を持つ両義性にある。それゆえ、天体の運行と個人の時の流れの宥和をはかるため、九曜神そのものへの祈願が必要となる。特に、南インド、タミル・ナードゥ州中部地方では、元来地上での領域性を持たないこれら天空の惑星を特定の場に定位させ、独特の聖地ネットワークが形成されており、惑星と個人の関係性を最適化する手段として九曜神巡礼を位置づけることができる。

本発表では、以上の九曜神寺院をルートに含む、民間の巡礼ツアー「バクティ・ウラー」での参与観察をもとに、九曜信仰にみられる巡礼の集団性の解体について考察していく。ここでこの集団とは、第一に宗派、第二に高位カースト性、第三に集団で行う儀礼的な行為によって認められる集合性を指す。巡礼集団としてのバクティ・ウラーは、参加者が高位カースト、特にヴィシヌ派のバラモンで占められ、巡礼スタイルとしては排他性が強く、浄性への厳格さが特徴である。さらに、常連の多さや日常生活においても同好会のような組織として宗教活動や市民活動を行い、巡礼の場のみならず、既に組織化されたコミュニティの様相をみせていることである。